

『サントスの御作業』の稿本——バレット写本の注記より——

川口敦子

1. はじめに

日本に初めて活版印刷機がもたらされたのは 1590 年 7 月のことであった。これ以降、幕府の禁教令に伴うコレジヨの解散によって日本での出版活動が停止する 1614 年まで、日本のイエズス会ではいわゆる「キリシタン版」の出版活動が精力的に行われた。しかしその大半は後世の弾圧と迫害によって失われ、現存するキリシタン版は約 30 点、その他には写本類が数点確認されているだけである。

1591 年刊加津佐版『サントスの御作業の内抜書』⁽¹⁾（一般には略して『サントスの御作業』と呼ばれる）は、現存最古のキリシタン版として知られている。ローマ字書きの日本語文で、十二使徒を始めとする諸聖人の伝記を収めたものである。

1591 年に成立した「バレット写本」⁽²⁾は、1590 年に来日したポルトガル人イエズス会士マノエル・バレットの書写による文書集であり、ローマ字書きの日本語文で福音書や奇蹟物語、聖人伝などを収めたものである。本文の行間及び欄外にはバレット自筆の注記（書き込み）が多く見られる。

バレット写本（以下「写本」とする）の 164r－368r に収められている聖人伝は、版本『サントスの御作業の内抜書』（以下「版本」または『サントスの御作業』とする）との関係が問題にされてきた。しかし、同年に成立した両者の関係は、よくわかっていない。

版本と写本の本文比較は、キリシタンの翻訳史やキリシタン版の制作過程を知る上で重要なものであるが、十分な研究がなされてきたとは言い難い。土井忠生氏や福島邦道氏による一部の聖人伝の本文比較の論考⁽³⁾があるが、それ以外は、それぞれの本文を理解するための注釈的な利用がほとんどである。写本と版本の本文の比較研究が進まなかったのは、写本所収聖人伝の閲覧が困難である⁽⁴⁾こともあるが、同年に成立した版本と写本所収聖人伝の本文の関係が明らかでないことも要因の一つであろう。

本稿は、バレット写本の注記を手がかりに、版本と写本所収聖人伝の関係を明らかにしていくことを目的とする。

2. 聖人伝諸本

2.1. 写本所収聖人伝と版本『サントスの御作業』

写本には 32 編、版本には 31 編（第 1 巻 17 編、第 2 巻 14 編）の聖人伝が収められている。写本に収められている 32 編の聖人伝のうち、13 編が版本第 1 巻、4 編が版本第 2 巻と共通する（表 1 参照）。

共通する 17 編の聖人伝の内容及び本文はよく似たものであるが、標題の違いや、本文の異同や欠落も多く認められる。

（1）標題

聖人伝全体の標題（書名）および各聖人伝の標題は、写本では原則としてポルトガル語で書かれているが、版本では日本語で書かれている。例 1-2 のように、写本所収聖人伝の中には、日本語に一部ポルトガル語が混在する標題を持つ例もある。

また、写本には聖人伝の出典は書かれていないが、版本では各聖人伝の題に続けて出典とその作者が記されている。

（例 1-1）写本＝ポルトガル語、版本＝日本語

Vidas gloriosas de algūs Sanctos E Sanctas. （何人かの聖人たちと聖女たちの栄光ある生涯）

（バレット写本 164r・所収聖人伝部分の冒頭）

SANCTOS NO GOSAGVEO NO VCHINVQIGAQI quan dai ichi. [サントスの御作業の内抜書 巻第一。]

（『サントスの御作業』第 1 巻表紙）

（例 1-2）写本＝日本語に一部ポルトガル語が混在、版本＝日本語

DE Sancto Eustaquio gosãguio no coto. [デ サント・エウスタキオ御作業のこと。]

（バレット写本 233r・聖エウスタキオ伝の題）

S. EVSTACHIONO go sagueô, narabini sono MARTYRIO NO YODAI : CORE .S. ANTONINO NO CAQI TAMO jôguanto, Pedro anatalibus to yû Bispo no qirocu ni miyetari.

[サント・エウスタキオの御作業、並びにそのマルチリヨの様体：これアント・アントニノの書き給ふ上巻と、ペドロ・アナタリブスといふビスポの記録に見えたり。]

（『サントスの御作業』第 1 巻 p. 275 「サント・エウスタキオの御作業」の題）

例 1-2 の場合、写本は、他の聖人伝の題と同じように「Vida de Sancto Eustaquio」（聖エウ

スタキオの生涯)とあるはずのところを、「de」だけを残して日本語に翻訳した題になっている。この問題については土井忠生氏の指摘があり⁹⁾、写本の標題が底本をそのまま受け継いだものなのか、あるいは底本の日本語をバレットがポルトガル語に書き改めたものなのか、どちらとも断定しがたい。

(2) 本文の異同

写本・版本の本文には、単語レベルの小さな異同の他、文単位での異同がある。

(例 2-1) 単語レベルの異同

三つの敵とは我が身、この世界、天狗、これなり。今日の喜びは大きな喜びなり。

(写本 164r 「序 (聖ペドロ伝)」)

三つの敵とは我が身、この世界、天狗、これなり。今日の祝ひはキリシタンのうちの第一の祝ひなり。

(『サントスの御作業』第1巻 p. 1 「サン・ペドロ伝」)

(例 2-2) 文・段落単位での異同

そもそもイタリアの国ロウマの大王をばオノリヨと申し、またグレシヤの国の大王をばアルカヂヨと申す。このご兩人ともにキリシタンの御司にてその国みなキリシタンダアデなれば、何れも豊かに治むる。そのご時代にロウマの帝王の第一の臣下にエウヘミヤノと申すご仁体は、勝れたる郎等の頭となる者を三千騎持ち給ふ。

(バレット写本 263r 「聖アレイシヨ伝」)

そもそもアルカヂヨとオノリヨ・エンペラドウルの時代にロウマの帝王の第一の臣下にエウヘミヤノと申す大人ありけるなり。

これは勝れたるご仁体にてまします故、郎等の頭となる者を三千騎持ち給ふ。

(『サントスの御作業』第2巻 p. 86 「サント・アレイシヨの御作業」)

(3) 本文の欠落

写本・版本それぞれの聖人伝には、対応する本文の箇所いくつかの欠落箇所がある。単語や文単位の欠落の他、時にはまとまった段落やエピソードの欠落が見られる。

(例 3-1) 文単位の欠落…写本に欠落がある例

サン・ペドロはジュデヨの子孫たるによって御主ゼズ・キリシトのご家風に任せて、クルスにかかり給ふなり。これらの道理に従って、今日エケレジャより深く祝ひ給ふものなり。

さればベ아트によってデウスのご内証に叶ひ給ふ人にてましますといふところばかりを喜び奉るもあり。

(『サントスの御作業』第1巻 p. 2 「サン・ペドロの御作業」)

サン・ペドロはジュデヨの子孫たるによって御主ゼズ・キリシトのご家風に任せてクルスにかかり給ふなり。

さればベ아트によってデウスのご内証に叶ひ給ふ人にてましましたるばかりを喜び奉るなり。

(バレット写本 164v 「序 (聖ペドロ伝)」)

(例 3-2) 文単位の欠落…版本に欠落がある例

或る時サン・ジョアン指をさして、その折節通り給ふゼズ・キリシト御扶け手にてましますことを教え給ふによって即時にサント・アンデレ ゼズ・キリシトのおん跡を慕ひ奉りておん弟子となり給ふなり。

(バレット写本 165r 「聖ペドロ伝」)

或る時サン・ジョアン指をさしてゼズ・キリシトを教え給ふによって、即ちサント・アンデレはゼズ・キリシトの御跡を慕ひ奉りてみ弟子となり給ふなり。

(『サントスの御作業』第1巻 p. 4 「サン・ペドロの御作業」)

(例 3-3) 段落・エピソードの欠落…写本に欠落がある例

さればロウマより国司の後継ペレニヨといふ仁体来たられけるが、ヒリッペを殺したきとの企てなれども、洛中の諸人大切に存じければ、叶はずして、武略をたくみキリシタンを尊むと申しなして、ヒリッペに近づき寄り謀って、刺し殺し申すなり。三日は死し果て給はずして、キリシタンを集められ、精を出だしてヒイデスを勧め、いよいよ力をつけ給ひて、ご時刻近づき給ひければ、尊き数多のしるし顕はれて 御アニメマ色体を離れ給ふ。

(『サントスの御作業』版本第2巻 p. 132 – 133 「サンタ・エウゼニヤの御作業」)

さればロウマより国司の後継ピリニヨといふ仁体来たれりけるが ヒリッペを殺したきとの企てなれども 洛中の諸人大切に存じければ 叶はずして キリシタンを集められ 精を出だしてヒイデスを勧め いよいよ力をつけ給ひて ご時刻到り給ひければ 尊き数多のしるし顕はれて御アニメマ色体を離れ給ふ。

(バレット写本 258r – 258v 「聖女エウゼニヤ伝」)

(例 3-4) 段落・エピソードの欠落…版本に欠落がある例

即ち乞食の着たる襤褸^(マヤ)をのがし給ひて、それを召されけるなり：その襤褸の裏に染み

着き重^(ママ)なれたる穢れを見れば目を苦しみ、そのうちに籠る悪^{ちゅう}臭の数々臭き匂ひ鼻を穿
って辺りへ近づくも難儀なる着物をひとと着給ひて御身の肌雪のごとくに白ければ隠
さるために黒煙ぼりの煤なども御顔より、御手、足まで塗り申され、同じく穢き帽
子を引き被り別してうるさき貧人どもの中に交はって居給ひ、…

(バレット写本 267r – 267v 「聖アレイシヨ伝」)

即ち乞食の着たる襦袢を脱がせ給ひて、それを召され、同じく穢き帽子を引き被り別
してうるさき貧人どもの中に交はって居給ひ、…

(『サントスの御作業』第2巻 p. 94 「サント・アレイシヨの御作業」)

(3) に挙げた例を見ても分かるように、このような欠落は版本・写本の両方にあり、
写本が版本の原稿であるとか、写本が版本を写したものであるというように単純に考える
ことはできないのである。

土井忠生氏は、聖エウスタキオ伝・聖女エウゼニヤ伝・聖アレイシヨ伝・聖パルラン伝
の本文の内容を比較した上で、「写本の本文は版本のに先行するものと観て誤りはない」と
している⁽⁶⁾。

尾原悟氏は、写本の本文が版本を見て訂正をしたと思われる痕跡が認められることから
「バレット写本の大部分がそっくりそのまま活字本を転写したのではなく、むしろ活字本
の完成原稿に先行しているのではないかと推測している⁽⁷⁾。

林田明氏は、写本と版本に異同が存在するという事実を根拠に、版本の草稿本と写本の
底本は兄弟関係にあるとした⁽⁸⁾。

しかし、写本と版本の間の関係について、それ以上のことは明らかにされていない。

2.2. 国字写本

なお、この他の聖人伝の伝本として、いくつかの国字写本の存在が知られている。寛永
年間水戸藩没収教書『さんとあれしよこんへそるの御さ行』、寛政年間浦上没収教書『ビル
前アナスタジャ御作業』、『ビル前サンタカテレナの御作業』、慶長 14 – 15 年 (1609-10)
頃の作といわれる『伴天連記』所収の『ルシヤの話』の4編である。

このうち、聖女ルチア (ルシヤ) 伝である『ルシヤの話』は、版本にもバレット写本にも
収められていない。版本やバレット写本に収められた以外の聖人伝も、いくつか流布してい
たのである。

『さんとあれしよこんへそるの御さ行』は、元和四年 (1618) の奥書を持ち、助詞や一

部の表現に小さな異同はあるが、その本文は版本の「サント・アレイシヨの御作業」に酷似している。對木聰子氏は『さんとあれしよこんへそるの御さ行』に、版本の一行に相当する分がそのまま脱落している箇所があることを指摘した。版本第2巻 109 ページの4行目と5行目が同じ qu で始まることから、国字に翻字する際に誤って4行目を写し落としたことによって、この脱落が起こったと考えるほかなく、したがって、国字写本『さんとあれしよこんへそるの御さ行』はローマ字版本からの翻字であると推定した⁹⁾。

『ビル前アナスタジャ御作業』と『ビル前サンタカテレナの御作業』は、版本「サンタ・アナスタジャの御作業」と「サンタ・カテリナの御作業」がそれぞれ共通話である。版本とは大体同じ本文であるが、言葉の言い換えが多いことが知られている。版本との前後関係については不詳である。

3. 参照注記からの考察

3.1. 参照注記に引用されている書物

写本には欄外に「Vide ...」（～を見よ）という形式で、参考文献と思われる書名を引用している注記（参照注記）がある。参照注記に挙げられている書名は『カテキズモ（catecismus）』1例、『舞（May）』8例、『善人の御作業（jenninno gosaguio）』あるいは『御作業（gosaguio / gosagueo）』が7例ある。以下に全用例を挙げる（*は本文への注記、#は欄外注）。

・『カテキズモ』

043r11# Vide cate/cismum /fol . 79 . go/passionno /dan : et fol . / 77 . 78 . -

・『舞』

006v01# Per a pin/tar a po=breza da / lapo , nos / May . . fol . / . 9 . . . （洞穴の貧しさを描くには、我々の『舞』9丁）（原文の lapo の意味不詳、lapa（洞穴）の誤りか）

011r13# Vide May . / fol . 91 . 92 . （『舞』91、92丁を見よ）

022v01# Vide May / fol . 17 . - /como busca a /Magdanella （『舞』17丁を見よ。マグダネラを探し求めるように）

049r01# Vide May / fol . 17 . : - /18 （『舞』17、18丁を見よ）

077r10# Vide May / fol . 17 . 18 （『舞』17、18丁を見よ）

078r05#(01 ~) Vide May / fol . 19 . 17 . /18 . 30 . 58 /59 . 66 . 91 . /92x . （『舞』19、17、18、

30、58、59、66、91、92 丁を見よ)

091r01# May , fol /122 . Tai/xoquã no /may . (『舞』122 丁を見よ。大織冠の舞)

098v08# per a se pin/tar a pobre/za do caza /onde naceo / Vide nos / May fol . 9 . (生まれた家の貧しさが描かれるためには、我々の『舞』9 丁を見よ)

・『善人の御作業』『御作業』

004r14# Vide gosanguio no fol . 333 , 314 . (『御作業』の 333、314 丁を見よ)

008v10# Vide Jenní /no goságuio /fol . 336 de /morte Hero/dis . - . (『善人の御作業』336 丁を見よ ヘロデの死について)

022v11* Vide gosanguiõno fol . 330 . de tryúpho &t . (『御作業』の 330 丁を見よ 勝利などについて)

026v01 # Vide gosá=/gueoõno fol . /262 p.a /a despedida/ de x.o - / (『御作業』の 262 丁を見よ キリストとの別れの部分) Vide 330 /de tryúpho- (330 を見よ 勝利について)

094r04# Vide jenninno gosaguiono fol . 330 . 331 . multa / in laudẽ o.nim sanctorũ . - .

(『善人の御作業』330、331 丁を見よ 全ての聖人たちの賛美の多さ)

097r13* Vide Jenninno gosanguiono fol . 330 . 331 . multa in laud . / Martyrũ , Virginumque (『善人の御作業』の 330、331 丁を見よ。殉教者たち、おとめたちの賛美の多さ)

ここに引用された『カテキズモ』『舞』『御作業』『善人の御作業』は、いずれもイエズス会で広く読まれていたと推定される書物である。

ロドリゲス『日本大文典』⁽¹⁰⁾ には『カテキズモ』からの引用が見える。

Deus tenchi manzõuo gosacu nasareta. (デウス天地万像を御作なされた。)
(「カテキズモ」
(Catechismo)

(『日本大文典』83v、訳本 p. 318)

『日本大文典』に引用された『カテキズモ』は日本語に翻訳されたものである。バレット写本に引用された『カテキズモ』も日本語訳のカテキズモ(公教要理)を指していると思われる。また、本文はラテン語だが、1586年にリスボンで日本の信徒のために印刷されたイエズス会版、ヴァリニャーノ著『Catechismus Christianae Fidei』(『日本のカテキズモ』)のことを指しているのかもしれない。いずれにせよ、当時『カテキズモ』と呼ばれる書物がイエズス会で広く使われていたのである。バレットもそのような『カテキズモ』を引用したのである。

『舞』は現存しないが、「nos May」（我々の『舞』）とあることから、イエズス会による『舞の本』であったと考えられる。『日本大文典』には次のような引用がある。

Icagaua xen naqui cudoqui naquyori focano cotozo naqui. （如何はせん泣きくどき泣くより外の事ぞなき。）「舞」（Mai）

（『日本大文典』90v、訳本 p. 343）

また、ロドリゲス『日本語小文典』⁽⁴¹⁾には

わが会の日本人が日本語の古典作品を会話体にまとめたもの、例えばわれわれの文字〔ラテン文字〕で印刷されている会話体の May（舞）

（『日本語小文典』4v、訳本・上 p. 38）

とあることから、「May（Mai）」という名の書物はイエズス会で広く使われていたものであり、出版されていたものもあった。写本に引用された「May」も版本であるとは限らないが、イエズス会で使われていた書物だったであろう。

『御作業』は、『日葡辞書』やロドリゲス『日本大文典』にも引用が見える書物である。この『御作業』は『サントスの御作業』であると言われているが、写本所収聖人伝との関係も考慮に入れて、出典を確認していく。

『日葡辞書』には、「Gosag.」「Gos.」という形式で出典が明記されているもので 9 例の『御作業』からの引用が見られる⁽⁴²⁾。次に挙げる 9 例のうち、(1)から(4)までの 4 例は、引用されている本文が版本『サントスの御作業』の該当箇所の本文と一致しており、これらの引用の出典が『サントスの御作業』であることがわかる。

(1) Ficaricacayaqi, u, aita. 強く光り輝く。例、Teqino meniua ficari cacayaqu azayacanaru yoroiuo qi, &c. 〔敵の眼には光り輝く鮮やかなる鎧を着、云々〕 1. Parte Gosag. (『御作業』第一部) 敵の眼にきらめき光るような、非常にきらびやかな鎧を身につけて。

（『日葡辞書』「Ficaricacayaqi」の項）

Teqi no me niua ficari cacayaqu azayacanaru yoroi uo qi, axigue naru vma ni nori, ...

（『サントスの御作業』第 1 巻 p.96 「サンチャゴの御作業」）

tequino meni ficari cacayaqu, asay.acanaru yoroy uo qui, axigue naru vmani nori, ...

（バレット写本 188v 「使徒聖ジャコボ・マヨル伝」）

(2) Magai, ò, òta. 誤る、または、疑う。例、Sucoximo magauanu Iosephga xòzocu narito. 〔少しも紛はぬジョゼフが装束なりと〕 2. p. Gos. (『御作業』第二部) それは、少しの疑いもなく、ジョゼフの衣である。

(『日葡辞書』「Magai」の項)

sucoxi mo magauanu Ioseph ga xōzocu narito ten ni auogui, ...

(『サントスの御作業』第2巻 p.14 — 15 「パチリアルカ・ジョゼフの御作業」)

- (3) Micome, uru, eta. ある人を十分に深く見て識別し、その人について良いとか悪いとかの考えを持つ。『Putifar coreuo micome tamaite yorozzuno buguiđuo ate voconō. [ブチハルこれを見籠め給ひて万の奉行を宛て行ふ] 2. part. Gosag. (『御作業』第二部)』ブチハルはジョゼフの人物を良く見て取って、彼にすべての職務を与えた。

(『日葡辞書』「Micome」の項)

Putifar core uo micometamaite yorozzuno buguiđ uo ate voconō.

(『サントスの御作業』第2巻 p.15 「パチリアルカ・ジョゼフの御作業」)

- (4) Ficojiri, u, itta. 引きずる。例、Canata conataye ficojiri, coxset fanarebanareni naru. [彼方此方へひこじり、骨節離れ離れになる] Secunda parte gosag. (『御作業』第二部) その人をあちらこちらへ引きずり回して、彼の手足は関節がばらばらになった。

(『日葡辞書』「Ficojiri」の項)

canata conata ye ficojiri, coxset mo fanarebanare ni naru yō ni xemetaru mono nari.

(『サントスの御作業』第2巻 p.201 「マルチリオの理 第十七」)

(1) は、バレット写本所収聖人伝にもほぼ同文の本文が存在するが、引用と『サントスの御作業』で「meniua」〔眼には〕とある箇所がバレット写本では「meni」〔眼に〕となっており、引用された本文は『サントスの御作業』に一致している。また、引用と『サントスの御作業』では「Teqi」「azayacanaru」「yoroi」とある箇所が、バレット写本ではそれぞれ「tequi」「asayacanaru」「yoroy」となっており、表記法についても、引用は『サントスの御作業』に一致している。

次の(5)から(9)までの5例は、主語の言い換えや、述語の活用形の改変など、『サントスの御作業』の本文とは小さな異同が見られるが、それ以外の部分では一致している。(6)はバレット写本にも該当する本文があるが、引用と『サントスの御作業』では「nuitçuqe」〔縫ひ付け〕とある箇所がバレット写本では「nuiccuqui」〔縫ひ付き〕となっており、『サントスの御作業』の方に一致している。

- (5) Fiqimucaye, uru, eta. ある物を引っ張って真っ直ぐに向かせる、あるいは、他の物の正面に向かい合わせる。例、Yagate Iosephno von curumauo Iacobno vō curumano mayeye fiqimucaye tamaitçutçu. [やがてジョゼフの御車をジョゼフの御車の前へ引き対へ給ひつづ] 2. part. Gosag. (『御作業』第二部) すぐさまジョゼフの車をジャコブの車の前へ

ぐるっと回した。

(『日葡辞書』「Fiqimucaye」の項)

yagate Josephno von curumauro Iacobno von curumano maye ye fiqimucaye saxetamaitcutçu,
Iacobno curumani nori tamaite, ...

(『サントスの御作業』第2巻 p.40 「パチリアルカ・ジョゼフの御作業」)

- (6) Nuitçuqe, uru, eta. 縫ってくつつける。例、Ixõni amatano xuguioquuo nuitçuqetari. [衣裳に数多の珠玉を縫ひ付けたり] Part. 1. Gosag. (『御作業』第一部) 着物にたくさんの宝石を縫いつけた。

(『日葡辞書』「Nuitçuqe」の項)

yxõ ni ua, xita ni acaqi mono uo qi, vye niua, vsuzumi iro no mono uo qi tamayeri. Sore ni amata no xuguioquuo nui tçuqetari.

(『サントスの御作業』第1巻 p.128 「サン・バルトロメウの御作業」)

yxoniua xitani acaqi monouoqi , vyeniua vsuzumino yrono monovo qitamayeri . Soreni amatano xuguioquuo nuiccuqui tari .

(バレット写本 196v 「使徒聖バルトロメウ伝」)

- (7) Naguecomi, u, õda. 投げ入れる。例、Ienniuo sanzanni tçucamatçuri, yuqino tçumoritaru anani naguecomi, &c. [善人を散々に仕り、雪の積もりたる穴に投げ込み、云々] I. p. Gosag. (『御作業』第一部) サントを手ひどく扱って、雪で一杯になっている穴の中へ投げ入れた。

(『日葡辞書』「Naguecomi」の項)

Sancto uo sanzani ni tçucamatçuri, yuqi no tçumoritaru ana ni nague comi, guchi naru saqibaxiri no gotoqu, ...

(『サントスの御作業』第1巻 p.180 「サン・フランシスコの御作業」)

- (8) Migoraxi. 見せしめ。例、Yojinno migoraxino tamenitote ixõuo fagui, fini cuburu. (余人の見せしめの為にとて衣裳を剥ぎ、火に焼ぶる) i. p. Gos. (『御作業』第一部) 他の人々の見せしめのためだと言って、その人の着物を剥ぎ取って、それを火の中へ投げ込んだ。

(『日葡辞書』「Migoraxi」の項)

yojin no migoraxi no tame ni tote, yxõ uo fagui, fi ni cube tamaye domo, xibaracu yaqezareba, ...

(『サントスの御作業』第1巻 p.192 「サン・フランシスコの御作業」)

(9) *Fiqinobe, uru, eta*. 引っ張って伸べ広げる。例、*Iennhoninno xusocuu fiqinobete xitani fiuo tacaxe, &c.*〔善女人の手足を引き伸べて下に火を焚かせ、云々〕 1. Part. Gosag. (『御作業』第一部) サンタの手足を広げて、その下に火をつけて、云々。

(『日葡辞書』「Fiqinobe」の項)

Virgem no von xusocu uo fiqi nobete, xitani fi uo taqaxe, yottari no tçuamono ni ...

(『サントスの御作業』第1巻 p.229 「サンタ・ヘボロニヤの御作業」)

(6) (8) (9) の例では、『サントスの御作業』と引用の本文に使われている表記法が異なる部分がある。(6) では、『サントスの御作業』には「yxð ni」とある箇所が、引用では「Ixðni」となっている。(8) では、『サントスの御作業』には「yxð uo」とある箇所が、引用では「ixðuo」となっている。(9) では、『サントスの御作業』には「taqaxe」とある箇所が、引用では「tacaxe」となっている。これらの表記法の違いは、『サントスの御作業』の表記法を、引用する際に『日葡辞書』の表記法の規範に合わせて改変したのだと考えられる。

なお、(2) (3) (4) (5) (7) (8) (9) の出典である聖人伝は、バレット写本には収められていないものである。このことから『日葡辞書』に引用された『御作業』の本文がバレット写本のものではないことが確認できる。

これらの例から、『日葡辞書』に引用された『御作業』とは、引用の本文と完全に一致する本文、あるいは酷似した本文を持つ『サントスの御作業』である可能性が高いと言える。『日葡辞書』は1603年(補遺は1604年)に出版されており、1591年に出版された『サントスの御作業』を入手し、『日葡辞書』の例文に利用することは難しいことではなかった。なお、引用に「1. Parte Gosag. (『御作業』第一部)」「Secunda parte gosag. (『御作業』第二部)」などとあるのは、その箇所の巻を指定しているのであり、『サントスの御作業』の巻と一致する。後述するように、現存する『サントスの御作業』は第1巻と第2巻を合冊した構成になっており、「第一部」「第二部」という指定があるのは、二巻構成の『サントスの御作業』を指しているからに他ならない。また、後述するように、『サントスの御作業』にはいくつかの稿本が存在したと考えられる。稿本の段階でいくつかの本文の校訂が加えられて「完成」した版本がすでに存在するのだから、あえて版本以前の稿本の本文を引用する必要はなかったと考えられる。したがって、『日葡辞書』に引用された『御作業』とは『サントスの御作業』のことである、と見るのが妥当であろう。

『日本大文典』に引用された『御作業 (Gosagueô)』は次の1例である。『日葡辞書』の例と同様、主語と述語が少し改められているが、『サントスの御作業』の本文と一致していると言える。

Sancta Febroniaua mata ippõno axiuomo quiraretaquitono furiuo mixetamõ (サンタ・ヘボロニヤは亦一方の足をも切られたきとの振を見せ給ふ。)[御作業] (Gosaguedô)

(『日本大文典』99v、訳本 p. 376)

Sancta ua von coye uo yame tamõ to miye tamaixi ga, mata ippõ no axi uo mo qirare taqi to no furiuo mixe tamayebe, tadaxite mo qire fate ...

(『サントスの御作業』第1巻 p. 235「サンタ・ヘボロニヤの御作業」)

このように、『日葡辞書』と『日本大文典』に引用された『御作業』とは、版本『サントスの御作業』であることが確認できた。ただし、バレット写本の参照注記に引用された『御作業』も『サントスの御作業』であるとは限らない。また、『善人の御作業』という書名はキリシタン版には引用例が無いため、それがどのような書物であるのか、検討の必要がある。

3.2. 参照注記の『善人の御作業』

写本に引用された『善人の御作業』と『御作業』は、同じ書物のことを指していると考えられる。『日葡辞書』で『サントスの御作業』が『御作業』と省略して引用されたように、写本の注記に引用された『御作業』は『善人の御作業』を省略したものであろう。

『善人の御作業』または『御作業』は聖人伝らしき内容の書物であると推測できる。可能性としては、版本の他に、写本所収聖人伝も挙げられる。書名を引用した参照注記はバレット写本所収福音書の部分にのみ存在し、聖人伝の部分には参照注記は存在しない。バレットが写本の後半部にある聖人伝を参照して、写本の前半にある福音書の注記に用いることは可能だったと考えられるのである。また、引用されている『善人の御作業』(『御作業』)の丁数(ページ数)は f. 262 から f. 336 までであるが、バレット写本所収聖人伝はバレット写本の 164r から 368r までであり、引用にある丁数を数では満たしている。したがって、バレット写本所収聖人伝の可能性も、念のため、検討しなければならない。

したがって、『善人の御作業』(『御作業』)が具体的にどの聖人伝を指しているかについては、次の三つの可能性が考えられる。

(a) バレット写本所収聖人伝

(b) 版本『サントスの御作業』

(c) 写本・版本のどちらでもない聖人伝

参照注記の内容から、『善人の御作業』(『御作業』)は最低でも 336 ページ(あるいは 336 丁)の本文を持つ書物であることがわかる。バレット写本はページ付けではなく丁付けなの

で、この注記方法では該当する丁の表裏を指定できない。この注記が写本を参照するものであるのならば、丁の表裏を指定できる注記がなされたはずである。また、注記の内容も該当する丁の内容と一致しない。したがって(a)の可能性は消える。

次の(b)については、版本を第1巻と第2巻とに分けて考える必要がある。第1巻の本文は294丁までしかないが、第2巻の本文は340丁まで存在する。『善人の御作業』が版本を指しているとするれば、それは第2巻である。注記の内容も、版本第2巻の該当ページの内容とほぼ一致する。

一箇所目は『善人の御作業』の330丁と331丁についてである。写本の22v11の本文への注記と26v01の欄外注記によれば330丁には「勝利などについて」「勝利について」描かれていることになっている。また、94r04の欄外注記と97r13の本文への注記によれば、330丁と331丁には「全ての聖人たちの賛美の多さ」と「殉教者たち、おとめたちの賛美の多さ」が描かれていることになる。版本第2巻の330ページから331ページを見てみると、そこには次のように、大勢の殉教者の信仰上の勝利を讃える内容が書かれている。

(前略)まことにデウスのグロウリヤここにあらはれ給ふなり。その故は、ゼンチヨのうちにありながら、その法に染まず、又これほどの猛勢なれば、干戈を起こし、防ぎ戦ひ給はんこともやすかるべけれども、その儀に及ばず、各々首をのべて誅せられ給ふことデウスの御合力なくしてかなはぬことなり。

又アデリヤノといふ悪王も一度に一万人の武士をマルチルに行はれたり。その時のパライゾの様体は何とあるべきや？ 一万人の人々マルチリヨの利運を開き給ひて、パルマのしるしを手に持ち、御主ゼズキリストの御旗をさしかざし、天の国に入り給ふべき時、もろもろのベアトはゼズキリストの御伴して、喜びの謳歌を奏して出で向かひ給ひ、御賞翫あるべき体 心も言葉も及ぶべからず。上古の家風には、大将たる人の運を開き、ローマに入洛の折節は嚴重の高粧を以て入らるるが故に、都城動いて踵をつぎ、遠近競ひて声を伝へ、その有徳を称讃する声々々として耳に満てるとなり。これ／さへかくのごとくある時んば、一人二人のみならず、一万人の大将大利運を開きて、天の都城に入り給はん時は、何とあるべきぞや？

又フランサの国レヨンといふ大城里にてはマルチルになり給ふ人数一万九千人なりと伝記に見えたり。余りに多勢殺害せられしによって、その国を流るる大河は皆血になりて流れたるとなり。(後略)

(『サントスの御作業』第2巻 p.330 - 331 「マルチリヨの理 第二十五」)

二箇所目は『善人の御作業』の336丁である。写本8v10の欄外注記によれば「ヘロデの

死について」描かれていることになっている。版本第2巻の 335 ページから 336 ページにかけては、二人のヘロデ王（エロウデス）の末期が描かれている。一人目のヘロデ王は、キリスト誕生の時に嬰兒虐殺を行なったヘロデ大王、二人目のヘロデ王はヘロデ大王の孫で、使徒大ヤコブ（サンチャゴ）を処刑したヘロデ・アグリッパである。

（前略）さて悪王どもの上を言へば、先づゼズスを害し奉らんがために、インノセンテスを害したりしエロウデスはジョセフの記録にあらはれたるごとく、難病を受けて盲目となり、三人の／子を殺し、終に自害して死したるものなり。又その次のエロウデスもサンチャゴを害し奉りてアンジョの御手より大病を受け、生きながら全身くさり、白蟲より喰らい殺されたるものなり。（後略）

（『サントスの御作業』第2巻 p.335 – 336 「マルチリオの理 第二十六」）

三箇所目は、『御作業（善人の御作業）』の 262 丁である。写本 26v01 の欄外注記によれば「キリストとの別れの部分」が描かれていることになっている。ところが、版本第2巻の 262 ページには、サン・クレメンテがローマを追放され、キリスト教徒が彼との別れを惜しむ場面が書かれている。

（前略）然れば悪王の下知に従って、〔引用者注：サン・クレメンテが〕ロウマを立ち給ふことをキリシタン衆承り及び、御暇乞ひのために、参り集ふ人々御別れを悲しむこと限りなし。人によつて御足元にひれ伏し、人によつては御袖にすがりつき、涙を流し、御傷より出づる血をいただき、名残を惜しむ有様余所の見る目も哀なり。（後略）

（『サントスの御作業』第2巻 p.262 「サンクレメンテのマルチリオのこと」）

この内容は、「キリストとの別れ」という注記の内容とは、やや一致していない感がある。ただし、注記の「x.o（キリスト）」は「xão（キリシタン）」の誤写である、と解釈すれば、参照注記の内容は「キリシタンとの別れの部分」となり、版本第2巻 262 ページの内容と一致することになる。前述した二箇所の内容とページ数が参照注記と一致していることを考慮すれば、この 262 ページについても内容が一致している確率が高い。したがって、ことさら(c)の存在を求める必要はなくなる。

以上のことから、写本の参照注記に引用された『善人の御作業』とは、版本『サントスの御作業』第2巻であると推定できる。

3.3. 版本の構成から見た「版本第2巻」と『善人の御作業』

ここで注目したいのは、注記に引かれている「fol. 262」のように、第1巻と第2巻の両方に存在するページを引用する場合には、この注記方法では、それが第1巻の 262 ページ

なのか第2巻の262ページなのかを指定できないということである。

バレットが現存する2巻合冊の形の版本を参照していたのならば、それが第2巻であること特定できる注記がなされたはずである。バレットが参照注記で巻の指定をしなかったのは、『善人の御作業』が、巻を指定する必要がない形態、つまり、一卷構成の書物だったからではないかと考えられる。

ここで、版本の構成について触れておく。

第1巻表紙〔サントスの御作業の内抜書 巻第一。〕

第1巻本文 (p. 1 – p.294、p.294 末尾に〔サントスの御作業。巻第一の終わり〕)

第1巻目録 (1葉、ページ付けなし)

第1巻の正誤表 (2葉、ページ付けなし)

白紙1葉 (裏に〔続くは第二巻なり。 サンー〕)

第2巻表紙〔サントスの御作業の内抜書〕

第2巻本文 (p. 1 – p. 340、p.340 末尾に〔サントスの御作業。巻第二の終わり〕)

第2巻目録 (2葉、ページ付けなし)

第2巻の正誤表 (3葉、ページ付けなし)

白紙1葉

第1巻・第2巻の「言葉の和らげ」(36葉、ページ付けなし)

版本『サントスの御作業』の装丁で、他のローマ字本キリシタン版と異なる点がある。それは、通しではなく各巻ごとにページ付けがされている点と、第1巻と第2巻との間に表紙が挟まれている点である。

他のキリシタン版では、複数巻から成る書物であっても、一冊の版本は通しでページ付けがされている。また、書物の題が書かれた表紙は、一冊につき一枚しか付けない。天草版『平家物語』(1592年刊)『エソポのハブラス』(1593年刊)『金句集』(1593年刊)は、これら三つの文書を合冊した形の版本であるが、最初から合冊を目的としていたようで、『平家物語』(p.1 – p.402)から『エソポのハブラス』(p.409 – p.506)、『金句集』(p.507 – p.553)まで、通しでページ付けがされている。また、『平家物語』と『エソポのハブラス』と『金句集』の間にはそれぞれの表紙が付けられているが、これも、元は別々に独立していた文書を一冊に合冊する形で出版したからであり、それぞれの文書の独立性を示している。

したがって、『サントスの御作業』の装丁上の特徴は、第1巻と第2巻の独立性を想起さ

せるものであると言える。

ところで、例えば天草版『平家物語』の本文奇数ページ上部の余白に「QVAN DAICHI. [巻第一.]」、1592 年天草刊『ヒイデスの導師 (信心録)』の本文の奇数ページ上部の余白にも「Quan dai ichi. [巻第一.]」などとあるように、複数巻で構成されているキリシタン版では、本文紙面の上部余白に巻数を示す文言が刷り込まれている。ところが、『サントスの御作業』の本文上部の余白には、そのような巻数を示す文言は印刷されていないのである。版本第 2 巻が『サントスの御作業』の第 2 巻であることを示す文言は、第 2 巻の表紙の前に付けられた白紙に印刷された「続くは第二巻なり。」と、第 2 巻本文の末尾の「サントスの御作業。巻第二の終わり」だけである。それ以外の本文の紙面には、それが「第 2 巻」であることを示す文字はどこにもないのである。版本第 2 巻の表紙にすら「第 2 巻」と示す文言が印刷されていないのも不思議である。

第 2 巻の表紙の前に付けられた白紙の裏の文言は、別刷りの紙を製本段階で付け加えたものかもしれない。第 2 巻の本文末尾の文言も、そのページだけ活字を組み替えて印刷し直せばいいのである。これと同じことは版本第 1 巻についても言える。第 1 巻の場合、「第 1 巻」であることを示す文言は、全体かつ第 1 巻の表紙にある「サントスの御作業の内抜書 巻第一。」と、第 1 巻本文の末尾の「サントスの御作業。巻第一の終わり」だけなのである。これもそのページだけ活字を組み替えて印刷し直せばすぐに体裁を整えることができる。

キリシタン版には、表紙やほとんどの本文は変更せずに、ほんの一部だけの活字を組み替えて印刷し直した「異版」が存在するものがある。1603-04 年長崎刊『日葡辞書』については、ボードレイアン文庫本、パリ本、エヴォラ本の間に、印刷面や内容面にかかわる異同が約 50 箇所存在することが報告されている⁽¹³⁾。また、1596 年刊『コンテムツス・ムンヂ』の 6 ページの 6 行目から 7 行目は、活字の組み替えによる異文があることが知られている。即ち、ボードレイアン文庫本の「NON SATVRATVR OCV-los visu, nec auris auditu impletur. Ecclesia stes capite primo. Fitono manacoua mi-」という本文が、アンブロシアーナ文庫本では「OCVLVS non vidit, nec auris audiuit, nec in cor hominis ascendit, quae prae parauit Deus ijs, qui, diligunt illum. 1. Cor. 2. Manacoua mi-」と訂正されているのである⁽¹⁴⁾。これらの例からもわかるように、活字の一部を組み替えて再度印刷するということは、キリシタン版では珍しいことではなく、したがって、『サントスの御作業』も合冊・製本までの段階で、一部の活字を組み替えて体裁が整うように印刷し直した可能性は高いと言える。

本文の印刷内容から考えても、版本第 2 巻が、最初から版本第 1 巻と合冊する形の『サ

ントスの御作業』第2巻」として印刷されたのかどうか、疑問が残るのである。

その構成や装丁の状態を見れば、版本『サントスの御作業』は、元々はそれぞれ独立していた二冊の版本を後につなぎ合わせて体裁を整えたものである、と考えてもおかしくはない。このように考えると、写本の参照注記に引用された『善人の御作業』とは、『サントスの御作業』として合冊される以前の、独立した版本としての「版本第2巻」の名前であると推定される。

ただし、バレットが版本第2巻を直接見たとは限らない。写本には版本第2巻と共通する3編が収められているが、その3編には注記がまったくなされていない。彼が版本を見ていたのならば、共通する3編には当然気付いたはずであるし、本文の異同等を訂正したり、本文理解のための注記を書き加えたはずであると思われるのだが、実際にはそういったことは行われなかった。

福島氏はこの点について、参照注記に引用された書物は版本であると断定し、版本が写本に先行すると判断した結果、バレットが版本の存在を知らずに写本の聖人伝を筆写したのではないかという推測をするに至った⁽¹⁵⁾。しかし、参照注記は写本の本文を写した後に書き込まれたものである可能性が高く、引用された書物が版本を指しているにしても、版本が写本に先行するという証拠にはならない。バレットが版本の存在を知りながらも内容を知らなかった、という考えも不自然であろう。

後述するように、バレットは日本語の授業のようなものに出席し、その際にこれらの注記を書き込んだのではないと思われる。バレットは、版本第2巻を直接見た上で注記を書き込んだのではなく、例えば、講義などで講師が参考文献程度に引用・紹介したものを、彼が参照注記として写本に書き込んだのではないかと考えられるのである。

4. 注記の偏りからの考察

バレット写本の注記は、全ての丁に書き込まれているのではない。写本は複数の文書から成る文書集であるが、バレットによる注記は、そのうちのいくつかの文書に集中して偏在しているのである（表2参照）。

森田武氏は、特に「福音第1部（4r－48r）」「福音第2部（84r－100v）」「聖母奇蹟物語（116r－158r）」「エウスタキオ伝（233r－245r）」「サンバルラン伝（332r－356r）」の5箇所に注記が著しいことを指摘し、これらの文書はテキストとして日本語の授業に使われ、バレットはその講義を聴講していたのではないかと推測した⁽¹⁶⁾。ただし、表2を見れば、

森田氏が挙げる 5 箇所以外の部分に施された注記の数も、無視することはできない量であることがわかる。

森田氏が指摘するとおり、写本に見られる注記の偏りは、これらの注記がバレットの連続的な学習の跡を示しているものと見なすことができる。聖人伝の部分について言えば、バレットは写本に収めた聖人伝のうち、使用したテキストに共通話があるものだけに注記を書き加えていったのではないかと考えられる。

ここで、聖人伝の注記の有無に注目してみると、注記が存在する 17 編のうち 14 編 (B01 – B12、B17、B29) が、版本第 1 巻と共通していることに気付く。残りの 3 編は「使徒聖バルナベ伝 (B13)」および「一万一千人のビルゼン (B23)」「聖女マリヤ・エヂチヤカ伝 (B26)」であるが、この 3 編は版本に共通話が存在しない。ただし、「一万一千人のビルゼン」と「聖女マリヤ・エヂチヤカ伝」のそれぞれ 1 例は単純な本文の訂正である可能性が高く、連続的な学習の跡を示す注記の例からは除外することができる。「聖女マリヤ・エヂチヤカ伝」の 1 例 (307v01) は本文「epresas」を訂正する注記「obras」であり、学習の結果としての注記ではなく、単純な本文訂正と考えられる。また、「一万一千人のビルゼン」の 1 例 (296v12) は本文「vchicoroxi (打ち殺し)」に対する注記「ycoroxi (射殺し)」である。これは学習の跡を示していると考えられなくもないが、本文の訂正であるとも考えることもできる。また、「一万一千人のビルゼン」の本文は 6 丁 (11 ページ)、「聖女マリヤ・エヂチヤカ伝」の本文は 18 丁 (34 ページ) であるが、この丁数は、注記が多く施されている他の部分と比べても決して少ない数ではない。もっと丁数が少ない部分でも、多くの注記が書き込まれているのである。しかし、この 2 編は、その丁数の多さに比べて注記がわずか 1 例しか存在しない。このことから、この 2 例は連続的な学習の跡を示す注記の例から除外しても差し支えないであろう。

したがって、バレットが何らかのテキストを参考にして注記を書き込んだと考えられる話は、「使徒聖ペドロ伝 (B01)」「使徒聖パウロ伝 (B02)」「使徒泥アンデレ伝 (B03)」「福音記者使徒聖ジョアン伝 (B04)」「使徒聖ジャコボ・メノル伝 (B05)」「使徒聖ジャコボ・マヨル伝 (B06)」「使徒聖トメ伝 (B07)」「使徒聖フィリッペ伝 (B08)」「使徒聖バルトロメウ伝 (B09)」「福音記者使徒聖マテウス伝 (B10)」「使徒聖シモンとユダス伝 (B11)」「使徒聖マチアス (B12)」「使徒聖バルナベ伝 (B13)」の 13 編の使徒伝と「聖エウスタキオ伝 (B17)」「聖バルラン伝 (B29)」の 15 編ということになる。この 15 編のうち、「使徒聖バルナベ伝」を除く 14 編は、版本第 1 巻と共通する話である。バレットが使用したテキストは、版本第 1 巻の構成と極めてよく似たものであったと考えられるのである。

現存する版本には使徒聖バルナベの話は存在しないのだから、バレットが写本の「使徒聖バルナベ伝」に注記を加える際に使用したテキストは、版本ではありえない。バレットがその学習のために使用したテキストは、少なくとも、写本に注記があつて版本との共通話がある 14 編 (B01 - B12、B17、B29) と、版本に存在しない「使徒聖バルナベ伝 (B13)」から成り、かつ、注記がされていない写本所収聖人伝を含まない聖人伝集だったと推測されるのである。これを仮に「稿本 A」とする。

この「稿本 A」から「版本第 1 巻」に至るまでの編集過程のどこかで、「使徒聖バルナベ伝」は削除され、現存の版本第 1 巻の話数に整えられていったと考えられる。この「削除」は、ただの偶然ではなく、それなりの編集の意図があつたと思われる。

写本に収められている「使徒伝」は 13 編 14 人である。一方、版本第一巻に収められている「使徒伝」は、12 編 13 人である。話数と人数が一致しないのは、使徒聖シモン（シモン）と使徒聖ユダ（ジュダス・タデウ）の二人分の話が一話になっているからである。

カトリックにおいて「使徒」といえば、まず「十二使徒」が思い浮かぶ。十二使徒を構成するのはペトロ（ペドロ）、アンドレア（アンデレ）、ヨハネ（ジョアン）、小ヤコブ（ジャコボ・メノル）、大ヤコブ（ジャコボ・マヨル／サンチャゴ）、トマ（トメ）、フィリッポ（フィリッペ）、バルトロメオ（バルトロメウ）、マテオ（マテウス）、シモン（シモン）、ユダ・タデオ（ジュダス・タデウ）、マチア（マチアス）の 12 人である。この 12 人以外にも、新約聖書の使徒言行録で「使徒」と呼ばれているパウロとバルナバ（バルナベ）も使徒として扱われる。ただし、『カトリック大辞典』によれば、本来の狭い意味で使徒と呼ばれるのは「十二使徒」の 12 人と、十二使徒と同等の権能があると初代教会に承認されたパウロだけである⁽¹⁷⁾。

版本が「十二使徒」という体裁になるように使徒伝を編集したと考えれば、「使徒聖バルナベ伝」が版本に収められなかった理由が説明できる。写本は聖パウロも聖バルナベも「使徒」として扱い、13 編 14 人の使徒伝を収めたのであろう。しかし、版本は使徒の中でも特に有名な「十二使徒」を選ぶという方針で編集したのではないか。その結果、十二使徒に数えられない使徒、聖バルナベの話は採用されなかったのである。しかし、聖パウロに限っては、その権能と知名度の高さゆえに十二使徒と同格の使徒として扱われており、使徒伝には欠くことのできない聖人だったので、使徒伝から削除されることがなかったのであろう。あるいは、単純に十二使徒の「十二」という数に合わせて、標題の数で数えて 12 編の使徒伝、という体裁にしたのかもしれない。その場合も、やはり真っ先に削除される対象となったのは、十二使徒ではない使徒聖バルナベだったのである。

5. 写本所収聖人伝の底本の形態

写本の底本がどのような形態のものであったか、ローマ字本・国字本ともに可能性があり、はっきりしない⁽¹⁸⁾。小堀桂一郎氏は、版本・写本に共通する祖本として「謂はば広本と呼んで然るべき大部の手稿本」の存在を推定し、版本・写本とも、先行するその広本「聖人伝写本集」のようなものからいくつかを選んで編纂したものである、と推測している⁽¹⁹⁾。一方、林田氏は、収められている聖人伝の順序も含めて、バレットは底本をそのまま機械的に忠実に書き写していったと推測している⁽²⁰⁾。

写本の「使徒聖ペドロ伝 (B01)」から「聖エウスタキオ伝 (B17)」までに限って言えば、別々の文書をばらばらに取り寄せて写したのではなく、ある程度まとまった形の文書集（一冊の書物）を底本としていたのではないかと推測できる痕跡がある。

「聖エウスタキオ伝」の末尾に、文書の終わりであることを示す「Finis (終わり)」(245r)の語が書き込まれている。この「Finis」という語は、写本では他に「主日の福音書」(4r－48r)の末尾(48r)、「キリストの受難の道具に関する対話」(78r－82v)の末尾(82v)、「守護天使の加護」(102r－103r)の末尾(103r)、「ロレトの聖母」の採録部分を除いた「聖母マリアの奇蹟物語」(116r－158r)⁽²¹⁾の末尾(158r)の4例であり、すべて一続きの文書集の「終わり」であることを示すものである。なお、版本では個々の聖人伝には「Finis」の語はなく、第1巻の最終話である「サント・エウスタキオの御作業」(聖エウスタキオ伝)の末尾には「サントスの御作業。巻第一の終わり」、第2巻の最終話の末尾に「サントスの御作業。巻第二の終わり」と書かれている。この「…の終わり」が写本の「Finis」に相当する語であるとすれば、やはり「終わり」という語は、個々の文書ではなく、まとまった形の文書集の末尾にのみ付される語であると考えられることができるだろう。したがって、「聖エウスタキオ伝」の本文末尾の「Finis」は、この「聖エウスタキオ伝」一編だけの終わりを示しているのではなく、「使徒聖ペドロ伝」から「聖エウスタキオ伝」に至るまでのまとまった文書集の終わりであることを示している可能性が高いのである。

また、写本の「B01」から「聖エウスタキオ伝」までに収められている話は、そのほとんどが版本第1巻と共通しており、順序に多少の異同はあるものの、ほぼ同じであると言える。

このように考えると、写本の「使徒聖ペドロ伝」から「聖エウスタキオ伝」までの部分は、「サン・ペドロの御作業 (S1-01)」で始まり「サント・エウスタキオの御作業 (S1-17)」

で終わる版本第1巻とよく似た順序・形態のひとまとまりの書物を底本としてたのではないかと推測できる。これは、版本が整えられていく過程での稿本の一つだったと思われる。これを仮に「稿本B」とする。写本所収聖人伝の底本は、この「稿本B」と、広本とでもいうべき聖人伝写本集から選んだものを集めたものと考えられるのである。

ところで、「使徒聖ペドロ」から「聖エウスタキオ」までに収められている聖人伝は、写本も版本も、ともに17話である。第17話までの部分だけを区切って見てみると、写本の第1話から第17話までの間の「聖女ザビイナ伝 (B14)」「聖女マリナ伝 (1) (B15)」「聖女マリナ伝 (2) (B16)」の3編は版本に共通話がなく、しかも注記が付けられていない。一方、版本の第1話から第17話までの間には、写本と共通話がない聖人伝が「聖イグナチオの御作業 (S1-13)」「聖フランシスコ (S1-14)」「聖女ヘボロニヤの御作業 (S1-15)」と、やはり3編収められている。写本に注記がない3編は、前述の通り、パレットが参考にしたテキストに同じ聖人伝が収められていなかったからであると考えられる。

版本にありながら写本にはない聖人伝が、注記がされなかった写本の聖人伝と、同数の3編であるというのはただの偶然とは考えにくい。これは、版本に至るまでの草稿の編集過程において、これら3編の差し替えがあったという可能性を示しており、版本には少なくとも一種類以上の稿本が存在していた傍証ともなる。もちろん、3編という数字の一致はただの偶然である、という可能性も否定できない。しかし、写本（の底本）と版本のそれぞれにおいて、ひとまとまりの文書集と考えられる17話までの間に、写本と版本がお互いに共通話を持たない3編が、同じような順番に位置し、まとまって収められている、というのを「全くただの偶然である」と済ませてしまうわけにもいかないのではないだろうか。

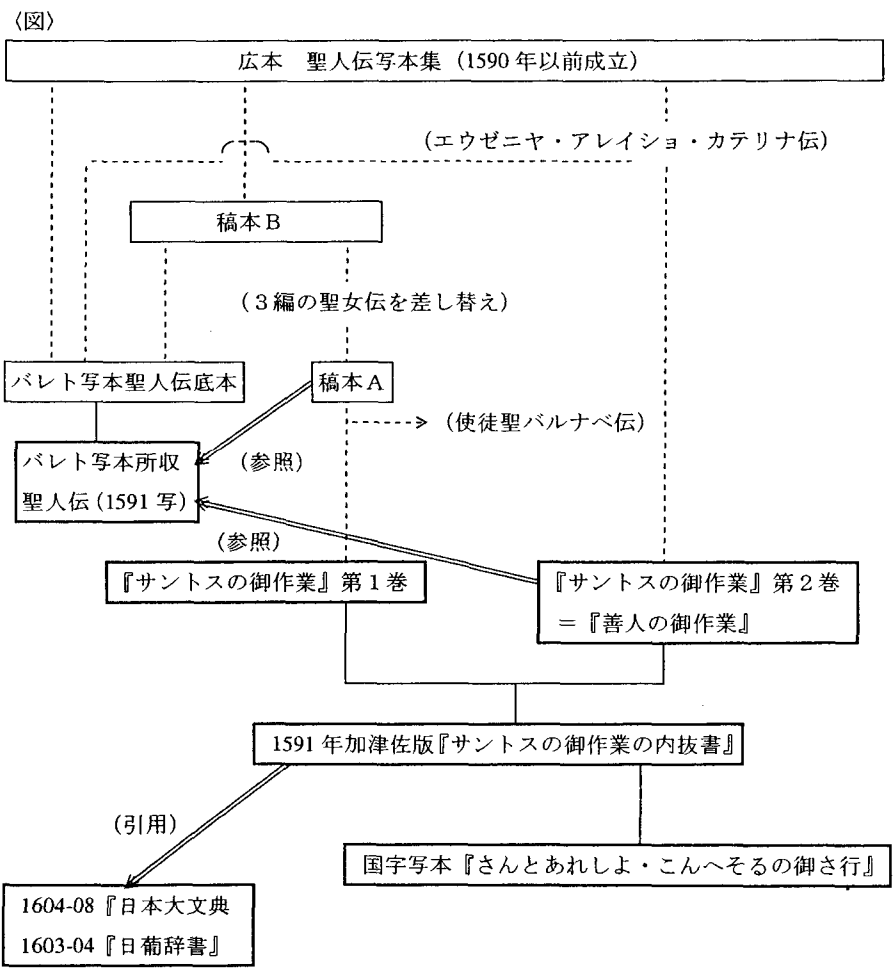
6. まとめ

以上の考察をまとめると、後の〈図〉のようになる。

写本も版本も、その源流は、1591年以前にすでに日本で翻訳されて写本の形で広まっていた「聖人伝集」であったと思われる。ただし、その成立までの間には、何度かの編集作業を経た、いくつかの稿本があったと考えられる。

「使徒聖ペドロ伝 (B01)」から「使徒聖バルナベ伝 (B13)」までの13編の使徒伝と、「聖女ザビイナ伝 (B14)」「聖女マリナ伝 (1) (B15)」「聖女マリナ伝 (2) (B16)」の3編、そして「聖エウスタキオ伝 (B17)」と「聖バルラン伝 (B29)」から成るのが「稿本B」で

ある。この「稿本B」は、写本の第1話から17話までの部分の底本と想定され、さらに版本第2巻と共通話がある「聖女エウゼニヤ伝 (B18)」「聖アレシヨ伝 (B19)」「聖女カテリナ伝 (B20)」と、それ以外の写本所収聖人伝によって構成されたものがバレット写本所収聖人伝の底本であったと考えられる。



「稿本B」の3編の聖女伝（B14－B16）を「サント・イグナチオの御作業（S1-13）」「サン・フランシスコの御作業（S1-14）」「サンタ・ヘボロニヤの御作業（S1-15）」の3編と差し替えたと考えられるのが「稿本A」である。バレットはこの「稿本A」を参考テキストとして使用し、写本文への注記を書き込んでいったと考えられる。

さらに「稿本A」から「使徒聖バルナベ伝（B13）」を削除したのが「版本第1巻」ということになる。

一方、写本との共通話がある「サンタ・カテリナの御作業（S2-03）」「サント・アレイシヨの御作業（S2-04）」「サンタ・エウゼニヤの御作業（S2-05）」と、グラナダの著書からの抜粋『マルチリヨの理』、そして、写本に共通話がないそれ以外の聖人伝から構成されたのが「版本第2巻」である。この「版本第2巻」は「善人の御作業」という書名で写本の参照注記に引用されている。

以上のような過程を経て成立した「版本第1巻」と「版本第2巻」に、それぞれの正誤表を付け、さらに両巻の「言葉の和らげ」を付けて合冊されたのが、現存する『サントスの御作業』なのである。

これら稿本の編集過程においては、聖人伝の本文の改訂の他、順序の入れ替えなどもあったと考えられる。もちろん、それぞれの稿本の中間過程に、さらなる稿本の存在があった可能性もおおいに考えられる。

『サントスの御作業』は、その成立過程においていくつかの稿本が存在し、これらの稿本と写本、そして版本とが複雑に影響しあっていたことがわかる。

今回、写本と版本の関係を明らかにしていくことで、キリシタン版の出版の手順など、その編集作業の一端を垣間見ることができた。今後、この考察を踏まえた上で、写本と版本の本文比較研究を進めていく必要がある。

〈注〉

(1) オックスフォード大学ボードレイアン文庫、イタリア国立マルチアナ図書館にそれぞれ一冊現存。テキストはボードレイアン本（『サントスの御作業』勉誠社 1976）を使用。福島邦道編『サントスの御作業 翻字・研究編』（勉誠社 1979）および尾原悟『サントスのご作業』（教文館 1996）を参照しつつ、私に翻字を示した。また、必要に応じて原文を提示し、その場合には角括弧〔 〕内に翻字を示す。引用する標題などにポルトガル語がある場合には、丸括弧（ ）内に私に日本語訳を付す。なお、引用本文に付された傍線（下線）は、特に注記の

ない限り、引用者によるものである。

- (2) ヴァチカン図書館所蔵古写本 Reg. Lat. 459。テキストは、木田章義先生御所蔵のマイクロフィルムを借覧した。
- (3) 土井忠生『吉利支丹文献考』（三省堂 1963）p.223 - 258、福島邦道『キリシタン資料と国語研究』（笠間書院 1973）、同『続キリシタン資料と国語研究』（笠間書院 1983）、同『続々キリシタン資料と国語研究』（笠間書院 1995）。
- (4) 写本所収聖人伝の影印本は未だ公開されていない。これまで長い間、個人による翻字が数編ずつ発表されてきただけであったが、近年公開された尾原悟氏の『サントスのご作業』（教文館 1996）によって、写本所収聖人伝全ての翻字を読むことができるようになった。
- (5) 土井前掲書 p. 225 - 227。
- (6) 土井前掲書 p. 224。
- (7) 尾原悟『サントスのご作業』（教文館 1996.11）「解説・解題」p. 390 - 391。
- (8) 林田明「一五九一年書写写本「サントスの御作業」と版本について」千葉大学文学部『語文論叢』11（1983.11）、初出は『千葉大学人文学部紀要』1（1969.3）所収「一五九一年バレット手記写本「サントスの御作業」」。
- (9) 對木聰子『「サントスの御作業」国字本の脱落』東京女子大学史学研究室『史論』8（1960）。
- (10) 引用は、土井忠生訳『日本大文典』（三省堂 1955）による。
- (11) 引用は、池上岑夫訳『ロドリゲス日本語小文典（上・下）』（岩波書店 1993）による。
- (12) 森田武編『邦訳日葡辞書索引』（岩波書店 1989）p.301 による。
- (13) 大塚光信解説『エヴォラ本日葡辞書』（清文堂 1998）p. 814 - 816。
- (14) 海老沢有道解説『南欧所在吉利支丹版集録 コンテムツス・ムンヂ』（雄松堂 1978）解説 p.3 - 4。
- (15) 福島邦道『続キリシタン資料と国語研究』（笠間書院 1983.7）p. 127 - 128。
- (16) 森田武『天草版平家物語難語句解の研究』（清文堂 1976.3）p. 380。
- (17) 上智大学編『カトリック大辞典』Ⅱ（富山房 1943）p.477。
- (18) 拙稿「バレット写本の「四つがな」表記から」『国語学』第 51 巻 3 号（通巻 203 号）（2000.12.）参照。
- (19) 小堀桂一郎「天道放（四）」『紀要 比較文化研究』31（1993. 3）。
- (20) 林田前掲論文。
- (21) 写本所収「聖母マリアの奇蹟物語」は、大きく見れば 116r から 163r までの文書集である。ロレトの聖母やモンセラートの聖母など、複数の聖母マリアの奇蹟物語を集めた 116r から

158r までの部分で文書は一旦終わっており、その後に、「ロレトの聖母マリア」の物語が採録される形で付けられている。したがって、116r から 158r までの部分で一つの文書が終わっていると見なすことができる。

(かわぐち あつこ・博士後期課程)

(表 1)

《バレット写本所収聖人伝と版本『サントスの御作業の内抜書』対照表》

* 太字は対応関係があるもの、斜字は順序が変わっているもの。

Bはバレット写本、S1は版本第一巻、S2は版本第二巻をさす。

バレット写本所収聖人伝	サントスの御作業の内抜書
B00- <i>Vidas gloriosas de alguns Sanctos E</i> S anctas. (書名、序文)	S1-00-(S. Pedro S. Paulo.) (序文)
B01-使徒聖ペドロ	S1-01-使徒サン・ペドロ
B02-使徒聖パウロ	S1-02-使徒サン・パウロ
B03-使徒聖アンデレ	S1-03-使徒サント・アンデレ
B04-福音書記者使徒聖ジョアン	S1-05-福音書記者(使徒)サン・ジョアン
B05- (使徒) 聖ジャコボ・メノル (小ヤコボ)	S1-04-使徒サント・ジャコベ・メノル (小ヤコボ)
B06-使徒聖ジャコボ・マヨル (大ヤコボ)	S1-06-使徒サンチャゴ (大ヤコボ)
B07-使徒聖トメ	S1-07-使徒サン・トメ
B08-使徒聖フィリップ	S1-08-使徒サン・フィリップ
B09-使徒聖バルトロメウ	S1-09-使徒サン・バルトロメウ
B10-福音書記者使徒聖マテウス	S1-10-福音書記者使徒サン・マテウス
B11-使徒聖シマンとジュダス	S1-11-使徒サン・シモンと使徒サン・ジュダス・ タデウ
B12-使徒聖マチアス	S1-12-使徒サン・マチアス
B13-使徒聖バルナベ	—
B14-聖女ザビナ	—
B15-聖女マリナ (1)	—
B16-聖女マリナ (2)	—
—	S1-13-サント・イグナチオ
—	S1-14-サン・フランシスコ
—	S1-15-サンタ・ヘボロニヤ
(B29-聖バルラン)	S1-16-サン・バルランとサン・ジョザファッ
B17-聖エウスタキオ	S1-17-サント・エウスタキオ
—	S2-01-パチリアルカ・ジョゼフ (旧約聖書のヨセフ)
—	S2-02-サント・セバスチャン

B18-聖女エウゼニヤ	S2-05-サンタ・エウゼニヤ
B19-聖アレシヨ	S2-04-サント・アレシヨ
B20-聖女カテリナ	S2-03-サンタ・カテリナ
B21-聖女タイス	—
B22-聖ジュストとパストル	—
B23- 一万一千人のビルゼン	—
B24-聖女アポロニヤ	—
B25-聖女アナスタシヤ	—
B26-聖女マリヤ・エヂチャカ	—
B27-聖マンシヨ	—
B28-聖マウリチオ	—
B29-聖バルラン	(S1-16-サン・バルランとサン・ジョザファツ)
B30-四十人のマルチレス	—
B31-聖ボニファシオ	—
B32-聖女クリスティナ	—
—	S2-06-サント・エステワン
—	S2-07-サン・ラウレンシヨ
—	S2-08-サン・ヴィセンテ
—	(以下、L. グラナダの著書から) S2-09, 10, 11-マルチリヨの理 (序文、第17・18章)
—	S2-12-サンタ・オラリヤ
—	S2-13-サンタ・マルチナ
—	S2-14-サンタ・アナスタシヤ (第19章)
—	S2-15-サン・クレメンテ (第20章)
—	S2-16, 17-マルチリヨの理 (第21・22章)
—	S2-18-サン・シメオン (第23章)
—	S2-19-サン・ポリカルボ (第24章)
—	S2-20, 21-マルチリヨの理 (第25・26章)

(表2)《バレット写本に収められている文書と注記数》

丁数		バレット写本に収められている文書	頁数	本文注 記	欄外注 記	注記合 計	版1	版2
001r-003r		十字架の奇蹟物語	5	0	5	5	*	*
004r-048r		主日の福音書	89	136	136	272	*	*
049r-050v		キリスト復活後の祝日の福音書	4	0	1	1	*	*
052r-060r		四旬節の金曜日の福音書	17	3	1	4	*	*
060v-077v		キリストの受難物語	35	0	2	2	*	*
078r-082v		キリストの受難の道具に関する対話	10	5	14	19	*	*
084r-100v		聖人の祝日の福音書	34	56	66	122	*	*
102r-103r		守護天使の加護	3	0	0	0	*	*
108r-110r		(主日の福音書の目次)	5	0	0	0	*	*
110v-111r		(聖人の祝日の福音書の目次)	2	0	0	0	*	*
116r-158r		聖母マリアの奇蹟物語	65	263	40	303	*	*
158v-160r		(聖母マリアの奇蹟物語の目次)	4	0	0	0	*	*
161r-168r		ロレトの聖母マリアの物語	15	0	0	0	*	*
164r-368r		聖人伝	***	*****	*****	*****	*	*
165r-168r	B01	使徒聖ペドロ	7	6	16	22	○	
168v-173r	B02	使徒聖パウロ	10	2	22	24	○	
173v-178r	B03	使徒聖アンデレ	10	0	16	16	○	
178v-181v	B04	福音記者使徒聖ジョアン	7	0	12	12	○	
182r-184v	B05	(使徒) 聖ジャコボ・メノル (小ヤコボ)	6	0	6	6	○	
185r-189r	B06	使徒聖ジャコボ・マヨル (大ヤコボ)	9	0	6	6	○	
189v-193v	B07	使徒聖トメ	9	0	21	21	○	
194r-195v	B08	使徒聖フィリッペ	4	0	4	4	○	
196r-199r	B09	使徒聖バルトロメウ	7	0	14	14	○	
199v-202v	B10	福音記者使徒聖マテウス	7	0	11	11	○	
203r-208r	B11	使徒聖シマンとユダス	11	1	17	18	○	
208v-215v	B12	使徒聖マチアス	15	0	9	9	○	
216r-224v	B13	使徒聖バルナベ	18	1	10	11		
225r-226r	B14	聖女ザビナ	3	0	0	0		
226v-228v	B15	聖女マリナ (1)	5	0	0	0		
229r-232v	B16	聖女マリナ (2)	8	0	0	0		
233r-245r	B17	聖エウスタキオ	25	143	33	176	○	
245v-262v	B18	聖女エウゼニヤ	35	0	0	0		○
263r-275v	B19	聖アレイショ	26	0	0	0		○

276r-289a	B20	聖女カテリナ	27	0	0	0		○
289av-291	B21	聖女タイス	6	0	0	0		
291v-293r	B22	聖ジュストとパストル	4	0	0	0		
293v-298r	B23	一万一千人のビルゼン	11	1	0	1		
298v-300v	B24	聖女アポロニヤ	5	0	0	0		
301r-305r	B25	聖女アナスタシヤ	9	0	0	0		
305v-322r	B26	聖女マリヤ・エヂチャカ	34	1	0	1		
322v-326v	B27	聖マンシヨ	9	0	0	0		
327r-331v	B28	聖マウリチオ	10	0	0	0		
332r-356v	B29	聖バルラン	50	423	104	527	○	
357r-359v	B30	四十人のマルチレス	6	0	0	0		
360r-364r	B31	聖ボニファシオ	9	0	0	0		
364v-368r	B32	聖女クリスティナ	8	0	0	0		
368v-379r		(事項索引)	22	0	0	0	*	*
380r-381r		(聖人伝の目次)	3	0	0	0	*	*
381v		(全体の内容目次)	1	0	0	0	*	*